

1 学校教育目標

- ・自ら考え学ぶ人
- ・共に生きる人
- ・健やかに伸びゆく人

2 めざす学校像、児童・生徒像、教師像

○学校像	・9年間を通したカリキュラムを実践し、将来、社会の一員としての役割を果たすために必要な能力・態度を身に付けた児童・生徒を育成する学校。
○児童・生徒像	・粘り強く、主体的・継続的に学ぶ子 ・心身ともに健康で、情操豊かな子 ・自己実現を図り、社会に貢献できる子
○教師像	・明るく誠実に職務に取り組む教師 ・一人一人の児童・生徒の良さを伸ばせる教師 ・児童・生徒が意欲的に学習できる、魅力的な授業を行える教師

3 学校の現状及び前年度の成果と課題

1 学校の現状

- (1) 小中一貫教育校の特徴を生かし、9年間を3つの期に分けている。Ⅰ期の1年生から4年生は、東校舎で学校生活を送っている。4年生は最高学年としてリーダーシップを発揮している。Ⅱ期の5、6年生は中学生と同じ西校舎に在籍し、生徒会活動や部活動に参加している。また、一部で教科担任制授業を行っている。中学校へのスムーズな移行ができており、中1ギャップはない。Ⅲ期の8、9年生は地域のボランティア活動にすすんで参加し、地域の一員として活躍している。
- (2) 学習面では全体的に、基礎的・基本的な学習内容の定着に課題がある。家庭学習の定着も課題である。
- (3) 全教職員が兼務発令を受けており、合同で校内研究や交流授業を行っている。生活指導においても、児童・生徒の良さや課題を共有し、組織的に対応している。
- (4) 地域は、開かれた学校づくり協議会が中心となり、「花いっぱい運動」に熱心に取り組んでいる。また、通学時の安全指導や朝のあいさつ運動は、地域とPTAが協力して企画・運営している。地域の学校に対する支援は絶大である。

2 前年度の成果

- (1) 基礎学力の定着や学力の向上に向け、全校体制で組織的・計画的に実践してきた。授業改善を図ったことにより、児童・生徒の学習意欲が向上した。
- (2) 足立区ICT推進校として、タブレットやデジタル教科書を活用した先進的な授業が実施できた。

3 前年度の課題

- (1) 児童・生徒の健全育成について、保護者との協力体制が構築できず、改善できないことがある。
- (2) SNSによるトラブルが繰り返し起きている。また、家庭での使用時間が3時間を超えている生徒が多く、家庭学習に支障を来している。
- (3) むし歯の治療率は、昨年度よりも改善したが、小学生は4割、中学生は6割が未治療のままである。

4 重点的な取組事項

番号	内容	実施期間				
		27	28	29	30	31
1	学力向上	○	○	○	○	○
2	小中一貫教育の確立	○	○	○	○	○
3	キャリア教育の推進	○	○	○	○	○

5 平成31年度の重点目標

重点的な取組事項－1		学力向上
A 今年度の成果目標		平成31年度区学力調査目標通過率と年度末の到達目標
児童・生徒の基礎的・基本的な学力の定着をさせ、学力向上を図る。		<ul style="list-style-type: none"> 区学力調査目標通過率（4月実施） 小学校：75%、中学校：55% 年度末到達目標（2月実施） 小学校：75%、中学校：60%
B 前年度の取組み内容		
項目	具体的な方策	
授業力向上の取組み	<ul style="list-style-type: none"> 足立スタンダードを基準として、授業展開を改善した。 児童・生徒が自己の課題を明確にし、主体的に取り組める授業を展開した。また、発表の機会を意図的に設定した。 主幹・主任と若手教員とが小グループとなり、指導・助言し育成した。 	
家庭学習の徹底	<ul style="list-style-type: none"> 家庭学習ノートを活用した家庭学習の実施。未提出の児童・生徒は、休み時間や放課後に必ず取り組ませるようにして、提出を徹底した。 	
学力向上に向けた補充教室などの実施	<ul style="list-style-type: none"> 1～4年まではパワーアップタイム（15分）、全学年で小單元ごとの小テストや既習事項の確認テスト等を用いて、短期間で既習事項の振り返りを行い、定着度を把握する。 5～9年生は、朝学習（5分）で、小テスト及び読書を行った。 東校舎（1～4年）では、個別指導を要する児童を対象に、週4回放課後20分間以上、全教員で指導した。 西校舎（5～9年）では、毎日放課後20分間以上、全児童・生徒対象に補充学習を行った。また、異学年交流形式で教え合い学習を行った。 	
C 前年度の成果と課題		
1 成果		
<ul style="list-style-type: none"> (1) 児童・生徒の授業評価における、肯定的な評価が最大18%向上した。 (2) 小学校は、足立スタンダード形式で授業の展開ができた。中学校は、授業内に対話や発表の機会を意図的に設け実践することができた。コミュニケーション力や発表力が確実に向上した。 (3) 全校体制での補充教室や補習が概ね実施できた。 (4) ICTを活用した授業が展開できた。児童・生徒の活用力が向上した。 		
2 課題		
<ul style="list-style-type: none"> (1) 会議や行事準備により補充教室を実施できないことがある。 (2) タブレット端末を全教員が日常的に使用できない。 (3) 家庭学習ノート以外の自主的な家庭学習が定着しない。SNS使用時間などを含め、家庭との連携強化が必要である。 (4) 教師の授業力の向上に向けた、組織的な指導体制の強化。 		
D 今年度の目標実現に向けた取組み		
項目	達成基準	具体的な取組み
別紙 「平成31年度 学力向上アクションプラン」参照		
授業改善	<ul style="list-style-type: none"> 足立スタンダードを基準とした授業を展開し、児童・生徒が主体的に学習に取り組む授業の実施。 	<ul style="list-style-type: none"> 児童・生徒が自己の課題を明確にし、主体的に取り組める授業を展開する。 発表の機会を意図的に設定する。 主幹・主任による若手教員の育成。 校内研究のテーマを「プログラミング的思考の育成」として、研究授業や教科部会を小中の教員の合同で年間10回以上実施する。

児童・生徒の学習意欲の向上	<ul style="list-style-type: none"> ・年度末に実施する児童・生徒の学習・生活調査で80%以上の肯定的な評価。 	<ul style="list-style-type: none"> ・1～4年生を対象に、中学生が学習指導を行う補充教室を年間10回実施する。 ・週4回以上、放課後に補充教室を行う。個別指導の必要な児童・生徒には、教員が個別指導をする。
---------------	--	---

重点的な取組事項－2	小中一貫教育の確立
-------------------	-----------

A 今年度の成果目標	達成基準
特色ある教育活動を確実に実践し、保護者・地域から信頼され、児童・生徒が誇りに思える学園を目指す。	取組について、実践結果をまとめ、学校関係者に説明する。肯定的な評価を8割以上にする。

B 目標実現に向けた取組み

項目	達成基準	具体的な方策
小中一貫教育の取組を継承・発展させる。	<ul style="list-style-type: none"> ・学校評価の項目で、8割以上の肯定的な評価を得る。 ・児童・生徒の意識調査で、9割以上の肯定的な評価を得る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校と中学校の教員が共同で授業を行う。 ・中学校の教員が小学校の授業を担当する。 ・異学年が交流できる行事や学び合い学習を年間計画に基づいて実施する。
小中一貫教育の視点を明確にし、到達目標を共有し、実践する。	<ul style="list-style-type: none"> ・各学年及びⅠ期、Ⅱ期、Ⅲ期の各発達段階に即した達成基準を設定する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・管理職より指導・助言を受けながら、主幹・主任が中心となり企画・立案し、実施、反省、まとめまで責任をもって行う。

重点的な取組事項－3	キャリア教育の推進
-------------------	-----------

A 今年度の成果目標	達成基準
児童・生徒が、自ら考え、学習や生活に意欲をもって主体的に取り組めるようにする。	それぞれの取組の検証を行い、その結果を学校関係者に説明し、肯定的な評価を8割以上にする。

B 目標実現に向けた取組み

項目	達成基準	具体的な方策
自ら考え、主体的に行動できる児童・生徒の育成	<ul style="list-style-type: none"> ・年度当初と年度末に行う、学習・生活調査で評価を向上させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・全教員が授業で、主体的・対話的な学習の手法を取り入れ、児童・生徒の学びを深める。 ・児童・生徒が特別活動や行事などで、自ら進んで考え、創意工夫し、主体的に運営できるよう、指導・助言をする。 ・プログラミング的思考を育成することを旨とした授業を全学年で実施する。

別紙 「平成31年度 学力向上アクションプラン」

足立区立興本小学校 学校長 稲葉 守朗

新継	アクションプラン	対象・実施教科	頻度・実施時期	具体的な取り組み内容 <誰が、何を、どのように>	達成確認方法	達成目標(=数値) <いつまで・何を・どの程度>	実施結果	課題
1	Pタイム	全児童 国語	1～4年 火木金 朝 10分間	【指導者体制】 担任+副担任 【取組のねらい・目的】 知識及び技能の習得を図る。 【使用教材】 音読、視写、漢字教材	年1回区調査テスト (2月次年度の国語)	知識及び技能問題について全員が正答率を80%以上の結果を出す。		
		全児童 国語 算数	5. 6年国 語算数の授 業開始 5分間	【指導者体制】 担任+少人数担当 【取組のねらい・目的】 国語の知識及び技能、算数の数と計算の習得を図る。 【使用教材】 漢字、視写、計算教材	年1回区調査テスト (2月次年度の国語算数)	国語の知識及び技能、算数計算問題について全員が正答率を80%以上の結果を出す。		
2	Oタイム	1, 2年 全児童 国語 算数	土曜日 3校時 年7回	【指導体制】 担任+巡回指導員 +保護者ボランティア 【取組のねらい・目的】 国語の知識及び技能、算数の数と計算の習得を図る。 【使用教材】 1年 MIM 算数の教材 2年 算数の教材	毎月MIMテスト(1年のみ) 年1回区調査テスト (2月次年度の算数)	2ndステージの割合を1月までに半分以下にする。 算数計算問題について全員が正答率を80%以上の結果を出す。		
3	丸付け交流学習	1～4年 全児童 算数	水曜日 5校時 年6回	【指導体制】 担任+巡回指導員 +中学生ボランティア 【取組のねらい・目的】 基礎学力の定着を図るため、下学年までさかのぼり、つまづきを発見し解消する。 【使用教材】	1, 2年 2月区調査 3, 4年 年3回(5月、9月、12月) 東京ベーシックドリルAテ	算数計算問題について全員が正答率を80%以上の結果を出す。 満点の割合を4割にする。50%以下を0名にする。		

					1, 2年 算数の教材 3, 4年 東京ベーシックドリル	スト			
4	継続	放課後補充教室	5, 6年 全児童 国語算数	週4日 放課後 20分間	【指導体制】全職員 月1回中学生に教えてもらう。 学年補充での教えあいをする。 【取組のねらい・目的】 ①下学年の内容のつまずきを解消し、学力を向上させる。 ②理解が完全でない内容を補うため、ワークテストの間違い直しや解けなかった問題の解き直しなど個人の進度に合わせた課題をする。 【使用教材】ワークテスト プリント 区調査	年1回区調査テスト (2月次年度 国語 算数)	区調査で正答率を30ポイント以上あげる。		
			1～4年 個別指導を要する児童	週4日 放課後 20分間	【指導体制】全教員 【取組のねらい・目的】 ① 下学年の内容のつまずきを解消し、学力を向上させる。 ② 理解が完全でない内容を補うため、ワークテストの間違い直しや解けなかった問題の解き直しなど個人の進度に合わせた課題をする。 【使用教材】区調査 ワークテスト プリント	年1回区調査テスト (2月次年度 国語 算数)	区調査で正答率を30ポイント以上あげる。		
5	継続	授業改善	全児童 国語算数	年間	【指導体制】全教員 【取組のねらい・目的】 ① 自己の課題を明確にし、主体的に取り組ませる。 ② プログラミング的思考で問題を解決ができる。授業を年一回以上行う。 【使用教材】教科書他 管理職は、年間3回の授業観察時に改善に向けた指導助言を行う。	年1回区調査テスト (2月次年度 国語 算数)	通過する割合が前年度より5%減未満とする。		

					教科指導専門員による教員への指導を定期的に行う。				
5	継続	長期休業中補充教室	1～6年 個別指導を 要する児童 国語 算数	夏休み 10 回 春休み 2 回	【指導体制】全職員 【取組のねらい・目的】 ① 下学年の内容のつまずきを 解消し、学力を向上させる。 ② 理解が完全でない内容を補 うため、ワークテストの間 違い直しや解けなかった問 題の解き直しなど個人の進 度に合わせた課題をする。 該当学年の基礎学力定着を 図る。 【使用教材】プリント他	年 1 回区調 査テスト (2 月次年 度 国語 算 数)	区調査で正答率 を 30 ポイント以 上あげる。		
6	継続	あだち小学生夏休み 学習教室	3, 4 年 発展コース 希望者 国語 算数	夏休み 5 回	【指導体制】委託 【取組のねらい・目的】 上位の児童の学力を伸ばす。 【使用教材】区が作成した共通教 材	夏休み終了 後角野員テ ストの実施	全員が正答率 5%上げる。		

別紙 「平成 31 年度 学力向上アクションプラン」

足立区立扇中学校 学校長 稲葉 守朗

	新 継	アクションプラン	対象・実施教科	頻度・実施時期	具体的な取り組み内容 <誰が、何を、どのよう うに>	達成確認方法	達成目標（＝数値） <いつまで・何を・どの程度 >
1	継 続 ・ 改 善	〇タイムコンテスト	全学年 国語 数学 英語	年間 3 回 (各教科年間 1 回) 始業前 10 分 放課後 20 分	【指導体制】担任・各教科担当 【取り組みのねらい・目的】朝と放課後、 学習内容の復習・確認を行うとともに漢 字・英単語、計算等の基礎学力向上を 図る。 【使用教材】漢字、英単語、計算等の プリント学習	各教科年間 1 回、教科を指 定し、コンテ ストを実施	毎回のコンテスト で、90%以上の生徒 が正答率 80%を超え る。
2	継 続 ・ 改 善	放課後補習教室	全生徒 数学 他 4 教科	週 4 回 放課後 20 分 学年で教科指定 前期 4 回、後期 4 回 は全学年による数 学の教え合い	【指導体制】教科担任＋学年教員 【取り組み内容、ねらい・目的】つま ずきを さかのぼり、演習を中心に個別、1 対 2、 少 人数指導。進度は各個人で異なるが、復 習問 題は、期間内に終了するように、1 日に 進め る目安は伝える。 つまずきの多い生徒は数学科による取 り出 し指導を行う。 定期考査前はテスト対策を行う。 【使用教材】問題集・プリント教材・タ ブ レット	定着度確認テ スト（次年度 4 月に実施さ れる学年のも の） 7, 8 年で 2 月 に実施予定	2 月に実施する定着 度確認テストで対象 者が目標値を通過す る割合が、55%を超 える
3	継 続 ・ 改 善	サマースクール	全学年 数学 定期考査で正答率 50%未満の生徒各 学年 15～20 名程 度	夏季休業日中 7 日 間 各日 50 分	【指導体制】7 年は数学科 3 名＋教員 5 名 8, 9 年は数学科 3 名 【取り組み内容、ねらい・目的】7 月ま	最終日に確認 テストの実施 前期期末考査	7 年は確認テストで 全員の正答率が 20% 上昇する。 8, 9 年は前期期末考 査正答率が 10% (10

					<p>での 内容でつまずきを解消する。教科担任の 少人数指導のもと、定期テストで解けなかつた問 題の解き直しや週の授業内容で理解が完全で ない内容の補充問題を行う。 7年生は小学校のつまずき解消にむけた補 充問題も扱う。 【使用教材】プリント教材</p>		点) 上昇する。
4	新規	サマースクール	<p>全学年 英語 定期検査で正答率 50%未満の生徒各 学年 15~20 名程 度</p>	<p>夏季休業日中 7 日 間 各日 50 分</p>	<p>【指導体制】英語科教員 【取り組み内容、ねらい・目的】 7 月ま での 内容でつまずきを解消する。教科担任指 導の もと、定期テストで解けなかつた問題の 解き 直しや週の授業内容で理解が完全でない 内容 の補充問題を行う。 【使用教材】プリント教材</p>	前期期末検査	<p>7 年は前期期末検査 正答率が 5% (5 点) 上昇する。 8, 9 年は前期期末考 査正答率が 10% (10 点) 上昇する。</p>
5	継続	家庭学習の習慣化	全生徒	通年	<p>【取り組み内容、ねらい・目的】家庭学 習ノ ートを毎日提出させることで、学習習慣 の定 着化を図る。家庭学習課題を学年体制で 確認 する。提出できない生徒に対しては、そ の日 のうちに放課後指導等で課題を終了させ</p>	家庭学習ノート の点検	<p>7 月中までに全学年 提出率を 90%以上に する。その後も継続 して提出率を調査</p>

					てか ら下校・部活参加とさせる。		
6	継 続	授業改善	全教員 全教科	毎授業	【指導体制】管理職・各教科担当 【取り組みのねらい・目的】前時の内容の振り返りや既習事項を頻繁に盛り込むことを意識的に行う。授業のねらいを明確にし、発問や授業形態を工夫し、主体的・対話的で深い学びの授業の実践を意識的に行い、プログラミング的思考力を育てる。	定着度確認テスト（＝次年度4月に実施される学年のもの） 年間3回の授業観察・自己申告面接 生徒による授業評価（12月）	2月に実施する定着度確認テストで対象者が目標値を通過する割合が、55%を超える 12月実施の生徒による授業評価で肯定的な回答の割合が70%を超える。